CTLライブラリーをご利用ください

教育開発支援センター（CTL）の窓側にそそり立つ本棚。ここには教育に関する叡智がつまっています。学習科学のテキスト、FDやIRのハンドブック、文章作成指導や学習の参考書まで、先生方の研究・教育に、職員の方の業務に活用できる書籍ばかりです。私はAmosを用いた共分散構造分析（SEM）のテキストを愛読しています。少々マニアックなところが大変役立っています。閲覧・貸出は自由ですので、お気軽にお越しください。ご推薦いただける書籍なども随時受け付けています。

（教育推進部特別任命助教　多田泰紘）

書籍紹介

『グループワーク　その達人への道』

三浦真琴（著）、水方智子（執筆協力）

競争的学習に彩られた高校生活から解放された大学生に協調的学習の機会を提供できるのが高等教育機関です。社会人として必要な力をクリティカルコミュニケーションとサーバントリーダーシップと捉え、それを培うためのグループワークに如何なるphilosophyが必要であり、どのような仕掛け・工夫が可能であるのか、考えてみました。出版社の意図を反映して看護学生を対象とした説明が主となっていますが、本学における筆者の（失敗を含む）経験がベースとなっています。忌憚なきご意見・ご感想をお待ちしております。

（教育推進部教授　三浦真琴）

『主体的・対話的で深い学びの環境とICT -アクティブ・ラーニングによる資質・能力の育成-』

久保田賢一・今野貴之（編著）

本書は、現代社会で起きている課題に対し、その解決策を探り実行するために求められる実行力を培うために、様々な方法でICTを導入した教育の可能性を模索しています。初等教育から高等教育まで幅広い分野において、ICTを活用した対話的主体的で深い学びのあり方を問うている著書となっています。巻頭には詳細な用語集合、各章末にはさらに勉強したい人向けの文献を収録するなど初学者にもわかりやすく工夫された一冊となっています。　（教育推進部准教授　岩﨑千晶）

（教育推進部 岩﨑千晶准教授が、執筆者となっております。岩﨑千晶准教授　執筆担当：第14章　自律的な学びを支える学習支援とICT）

From CTL事務局

海外研修を終え、授業支援グループに配属されて早4か月がたった。研修で在籍したBoston Collegeの修士課程（International Higher Education）では、すべての授業でLMS（Canvas）が導入され、どの授業でもICTを活用した課題が出された。ある授業では、オンラインで複数人が同時に書き込めるプラットフォーム（Perusall）を利用し、事前にディスカッションを行い、課題や疑問点を整理してから授業に臨むことが求められた。また、他の授業ではPanoptoというビデオプラットフォームを使ってフィールドリサーチの中間報告・最終報告のプレゼン動画を作成・共有したり、授業設計に関する課題をウェブサイトを作成するアプリ（MediaKron）を使ってまとめる課題もあった。

ペーパーレス化・BYODも浸透しており、在学中はほとんど紙を触ることはなく、その代わりにノートPCとWifi、電源コードから離れられない毎日であった。授業の資料はすべてLMSからダウンロードし、ペーパーや修士論文もすべてLMSやEmailで提出するように指定された。このテクノロジー環境は、教員と学生を物理的な距離からも解放し、豪州の大学教授（メルボルン在住）が担当する授業をZoomで受講したり、教室にいながらにして全米各地・世界各国に在住するゲストスピーカーのお話を聴講し、質疑することができた。Zoomでの遠隔授業においても、ペアワークやディスカッションが取り入れられ、双方向型の授業がデザインされていた。

ボストンでの2年間は、学生としてテクノロジーを活用した学び・学習者中心の学びを体感するとともに、大学教育の在り方や教育開発の役割について考えるきっかけとなった。この度、教育開発支援センターの業務に職員として携われることになり、身の引き締まる思いである。本学の教育の質向上に向けて、理論と実践の両方を兼ねそろえた働きを模索していきたい。　（N）

KANSAI UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター　Kansai University Center for Teaching and Learning
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35　TEL: 06-6368-1513　FAX: 06-6368-1514
http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html
発行日／2018年12月20日　編集・発行／関西大学 教育開発支援センター

KANSAI UNIVERSITY

CTL Newsletter

Kansai University Center for Teaching and Learning

関西大学 教育開発支援センター
ニューズレター

December 2018
vol.28

Academic Integrity
―アクティブ・ラーニングの「学の実化」―

教育推進部教授　山本 敏幸

Academic Integrityという言葉がある。多くの人には聞きなれない表現かもしれないが、これはドナルド・マカーブ（Donald McCabe）教授による造語である。大学生の４分の３が学業不正をおこない、大学教授の３分の１がそのことを認識しながら何も対処していないという事実を明らかにした教授は、不正に対して罰則を与えるという一元的（にして表層的）な対応こそが、学業不正の解消を妨げていると考え、アカデミックな営みを確保するためには、学生自身の責任感・使命感を主軸にしたポジティブな考え方が必要であると警鐘を鳴らしたのである。

このAcademic Integrityという概念は、これまでのリアクティブ・ラーニングがプロアクティブ・ラーニングへと変化していく過程において、登場すべくして登場したものなのかもしれない。

今までは、人生経験が豊富な年長者から知恵を授かり、価値観を受け継ぐからこそ、社会の営みを持続することが可能となると考えられていた。ところが最近は、ITを使いこなし、新たな価値観や文化を創出しているのは若者である。人生の数歩先を歩き、未来の自分を想起させてくれる年上の人たちとの対話から得られる文化や価値が輝きを失い、過去をベースとして未来を見通すような「持続可能性」の考え方は修正せざるを得なくなっているのである。

教育推進部では、2009年よりラーニング・アシスタントの活用を本格的に開始し、学生の主体的な学びを推進してきた。先ほどの文脈になぞらえると、学生の主体的な学びは、大学での学びの経験に関して先輩格である大学の教師からではなく、同じ学びの苑で時を過ごす仲間からこそ得られる、ということである。未来を担う若者の現在に年長者の過去を投影させるのではなく、若者の育ち（の可能性）を信じ、慮ることに意味と価値がある、という考え方である。

ITの世界では、世界の文書類をビッグデータ化して、既に世に出ているものか、そこに剽窃があるかないかを瞬時に確認出来るような仕組みが出来上がり、商品化されている。このような仕組みを用いて不正行為を取りしまるのではなく、学生自身が自らのオリジナルの考えであり、意見であると胸を張ることのできる論文やレポートを書くことができるように支援していくのが、Academic Integrity の考え方なのである。そこには、アクティブ・ラーニングの真の具現化（学の実化）の姿があるのではないだろうか。

ICTの世界で、若い世代がITリテラシーに関する社会的な価値・概念を築き上げたように、近未来の教育を担う学生たちがAcademic Integrity を体現していくことによって、教員や研究者たちのResearch Integrityという価値を作り上げていく、そんな時代がすぐそこまで来ているように思う。

フォーラム・セミナー報告

FDフォーラム「高大接続の新しい形を求めて」を開催しました

日程：10月27日(土)13：00〜16：00
場所：千里山キャンパス第2学舎2号館C304教室

10月27日、千里山キャンパスにて「高大接続の新しい形を求めて」というテーマで、第20回関西大学FDフォーラムを開催しました。

高大連携の取組みが始まってから、大学教師による出前授業、あるいはオープンキャンパスなどが全国の大学で実施されていますが、そこには高校生と大学教師とのad hocな接触があるばかりで、高校教師と大学教師、あるいは高校生と大学生との交流は十分にはなされていません。高大接続という概念が示されてからは専ら入試のあり方にばかり焦点が当てられてきたうらみもあります。

本フォーラムでは、青年期にいる若者が高等学校と大学を通じてどのようなことを学んで社会へ巣立っていくのか、そこにこそスポットライトを当てるべきだとの考えに基づき、高等学校と大学の関係者が「学び」を柱とした新たな交流を広げていくための準備として、それぞれの取組事例を報告しました。

学力観の変化や学習指導要領の改訂、あるいは成績評価の厳格化など、高等教育を取り巻く新しい環境の下で、大学教師が学生の学びを充実させるためにどのような取組をしているか、立命館大学の沖裕貴教授からはご自身の実践の様子を交えた報告がありました。

SGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定を受けている本学の中等部高等部の松村湖生教諭からはPBL（Project Based Learning）の取組について報告がありました。中等部1年次より始まるPBLは、大学教授が恒常的にサポートするゼミに参加する高等部において、生徒の学びにさらなる広がりと深まりを付与していることが示されました。

兵庫県立氷上西高等学校の高橋信之校長と本学の山本敏幸教授からは、本学の学生が高校生と交流する「交渉学」を軸とした協働ワークショップについての報告がありました。「地方創生」が新しい接続・連携のかたちであることも示されました。また、大学生との協働に刺激を受けた高校生が中学生を対象に同様のワークショップを企画するべく動き出していることに、生徒・学生の「学び」を教育段階の別で分断してはならないとの意を強くしました。

（教育推進部教授　三浦真琴）

沖裕貴教授（立命館大学）

松村湖生教諭（中等部高等部）

山本敏幸教授（教育推進部）：左
高橋信之校長（兵庫県立氷上西高等学校）：右

学内FD情報

英語による科目開講の支援を目的としたグローバルFD実施中

英語による科目開講の支援を目的としたグローバルFDでは、英語での科目開講、学会発表に必要なスキル向上のための支援として、3つのプログラムを提供しています。申込者のニーズに応じた内容で講師と1対1で行う「英語マンツーマンセッション」、英語での科目開講に必要な教授法・授業運営、担当授業におけるCOIL（オンライン国際交流学習）の活用について個別に相談できる「グローバルFDオフィスアワー」、さらにプレゼンテーションのコツを学ぶ・スキルを磨くためのグループセッションである「グローバルFDシリーズ：プレゼンスキルを磨く2018」を実施しています。ご関心のある方は国際教育支援室へご連絡下さい。

問い合わせ先：国際教育支援室　kugf@ml.kandai.jp

FDフォーラム「BYODを活用した授業・学習環境を考える」を開催しました

※当初7月7日の開催を予定しておりましたが大雨により、延期となりました。

日程：11月10日(土)13：30〜16：30
場所：千里山キャンパス第2学舎2号館C403教室

教育開発支援センターは、11月10日に第19回関西大学FDフォーラム「BYODを活用した授業・学習環境を考える」を開催いたしました。現在、キャンパス内外における学生の主体的な学びを促進するため、学生所有のノートパソコン等を大学に持参させるBYOD（Bring Your Own Device）が注目されています。関西大学は2019年度からBYODを推奨することとなり、4月には自らのPCを持参する学生の姿も増えているかもしれません。こうした環境を構築する際、どのようなことに配慮すべきなのか、またどういった学習を展開することが望ましいのかを検討するために、すでにBYODを導入している九州大学の山田政寛准教授と、大阪教育大学の尾崎拓郎講師にご講演いただきました。 まず、尾崎拓郎講師より「BYOD推進への挑戦　PC必携化への道のり」と題して、BYOD導入の経緯や現状と課題についてご講演いただきました。続けて山田政寛准教授から「ラーニングアナリティクスに基づく授業改善〜BYODだからできるラーニングアナリティクスの展開〜」と題して、BYODを導入した後に、ラーニングアナリティクスを用いて、教育や学びのスタイルをどう改善していくことが望ましいのかについて報告を受けました。フロアからも質問が出され、有意義な意見交換が行われました。

（教育推進部准教授　岩﨑千晶）

質疑応答の様子
尾崎拓郎講師（大阪教育大学）：左・山田政寛准教授（九州大学）：右

初年次教育『プロジェクト学習1』学習成果報告会・準正課教育プログラム（仮）活動報告会を実施しました。

日程：8月2日(木)10：20〜11：40
場所：千里山キャンパス総合図書館ラーニング・コモンズ内ワークショップ・エリア

8月2日、千里山キャンパスにてプロジェクト学習1の学習成果報告会と準正課教育プログラム（仮）活動報告会が行われました。「プロジェクト学習1」とは、グループで課題解決に向かって活動しながら実社会に活かせるスキルを習得していく授業のことであり、「準正課教育プログラム活動（仮）」とは、学生同士で学内の活動を互いに支援し学びあう活動のことです。

本報告会は、学生の発表のスキルを高めつつ、本学の様々な学びの魅力を高校生に伝えることを目的として行いました。「プロジェクト学習1」からは9グループ、「準正課教育プログラム（仮）」からは11グループの学生が参加し、キャンパス見学に訪れていた高校生約100人に向けて日々の学習や活動成果についてポスター発表を行いました。発表者は、最初は緊張しつつも終盤は楽しみながら発表を行っており、高校生も真剣な面持ちで学生たちの話に耳を傾けていました。

発表者は「自分たちの活動の特色を詳しく知ってもらうことができて大変有意義だった」「この報告会によって自分も効果的に伝える力を身に付けられたと思う」と振り返りました。また、高校生にとっても現役の大学生から大学での活動についてリアルな声を聞くことができる貴重な体験となったようでした。今後はこのような活動の機会を関西大学の学びの特色の一つとして位置づけ、本学のポリシーである「考動力」の育成を図っていきます。

（教育開発支援センターアドバイザリースタッフ
本元小百合）